

1990

1991

1992

1993

1994

1995

1996

1997

1998

2002

2003

2004

2005

2007

2008

2009

2010

*And then...*

*1990-2010*

*As a philosopher and Advocate...*

## 1990年(63歳)

- マウント・サイナイ医科大学内にILC米国を設立。  
時期を合わせて日本のゴールドプランを米国で紹介する連続セミナーがバトラー博士により企画され、厚生省老健部長が出席した。バトラー博士の日本の高齢化政策に対する期待が強く表明され、米国厚生省や議員への働きかけを通じて、高齢化に関する日米合同委員会の設立が積極的に推進された。
- 日本社会事業大学内に伊部英男博士を理事長とするILC日本が設立され、設立総会出席のため来日。
- 笹川記念財団主催による高齢化に関する連続セミナー出席のため来日。

## 1991年(64歳)

- 日米ILC設立記念シンポジウム「プロダクティブ・エイジングー創造的な老後を求めて」出席のため来日。  
このシンポジウムにおいてバトラー博士は、人口高齢化に伴う社会のパラダイムシフトの必要性和、新しい価値観の確立を強く訴えた。

### 発言 国際長寿センター主催 第1回シンポジウム

56

同様に社会のグランドデザインの改革という視点から、独自の論を展開した伊部博士に対して、バトラー博士は強い共感と賛同を表明した。

- 笹川記念財団連続セミナー出席のため来日。

### 論評 ロバート・N・バトラーの横顔 ヴァル・J・ハラマンダリス

47

## 1992年(65歳)

- 国連高齢化に関する世界会議から10年を経たNYにおける集会で、先進諸国の認識不足と取り組みの遅れに対する率直な懸念を表明したスピーチ「未来に向けてエンジンの再点火を」が、参加者に大きな感動を与えた。

### 発言 国連「高齢化に関する国際行動計画」 採択10周年記念会議

59

- 笹川記念財団連続セミナー出席のため来日。

## 1993年(66歳)

- 日米政府間の高齢化に関する合同委員会開催(ベセスダ)。

### 活動記録 高齢化に関する 日米合同委員会

70

高齢社会の諸問題解決のために日米が協力し合う必要性があるとうたった政府間の共同声明を受けて開催されたこの委員会では、両国の厚生省が全面的に協力するなかで、研究者のみならず民間の知恵と情報や人材交流の重要性が語られた。

バトラー博士と伊部博士はともに委員に任命され、両国のILCは事務局を補佐した。

- ILC米国・日本初の共同事業として、ブダペストの国際老年学会においてバトラー博士は「長寿と社会」を発表。当初は日米両理事長による共同発表が予定されたが、伊部理事長は病気により参加は叶わなかった。

## 1994年(67歳)

- ジャパンソサエティとの共催による国際シンポジウム「活力ある高齢社会を目指して」をNYにて開催。

日本からは、阿部正俊氏、金平輝子氏、清家篤氏、山崎泰彦氏、福岡道生氏、行天良雄ILC日本理事などの専門家が出席した。米国からもバトラー博士を中心に、政策担当者、経済学者、マスコミ、企業代表などが参加し、日米の専門家による会議と一般市民向けのセミナーが開催された。

バトラー博士は基調講演において、高齢社会の到来は社会の活力を奪うというこれまでの定説に対して、データに基づき反論を展開した。

- 読売新聞創刊120周年記念の国際医療フォーラムにおける基調講演のため来日。

この講演では「長寿革命」による成果と懸念を冷静に分析しながら、長寿の長さではなくその質こそが問われるべきと指摘している。また日本やアメリカは21世紀に向けて、人口高齢化を予測した社会体制を準備できるかどうか問われている、と述べた。



## 1995年(68歳)

- クリントン大統領が主催する、第4回「高齢化に関するホワイトハウス会議」の諮問委員会議長に任命される。
- 日米専門家会議とシンポジウムに参加のため来日(大阪)。

1993年に第1回が開催された日米合同委員会は、その後米国での継続した予算化が困難なため頓挫することとなり、バトラー博士の失望は大きかった。

かわりに開催されたこの会議では、日米の専門家による社会医学、社会福祉、老年学の臨床分野における成果発表と意見交換が行われた。

同時に開催されたシンポジウム「我々は高齢者の自立をどう支援できるか」において、バトラー博士は自立実現に向けた五つのポイントを提唱した。

- イスラエルで開催された第2回IFA世界会議において基調講演を行う。「グローバル・エイジング：次世紀に向けた課題と歩むべき道の選択肢」をテーマに、開発途上国への支援や新たな社会保障制度の確立、ワークシェアリングによる雇用確保、老年医学の推進により、質の高い長寿社会を地球規模で享受できるようにすべきと訴えた。日本からは当時長寿社会開発センター理事長でもあった金田一郎ILC理事、横田安宏ILC事務局長などが参加した。

## 1996年(69歳)

- 宮崎で開催された「ねんりんピック」の国際シンポジウム「未来の担い手、シニアの新たな挑戦」において基調講演を行う。その後行われた金田一郎長寿社会開発センター理事長との対談においては、生きがいと健康づくりに関するアメリカの状況について、個人と企業、社会それぞれの取り組みを紹介した。

## 1997年(70歳)

- ILC4カ国共同シンポジウムを国連本部内のハマースホルド講堂にて開催。国連のアルバレス大使をはじめ、ILCはバトラー博士、森岡理事長、フォレットフランス理事長、グリーングロスイギリス理事長の4名が、高齢者のQOLについて各国の実情と課題について報告した。このような共同シンポジウム開催は、その後ILCの恒例となった。

- ILC日米両国が共同事業としてメディアプロジェクトを実施、NYにおいて日米メディア会議が開催された。

### 活動記録 日米メディアプロジェクト

この会議には日米の新聞・雑誌・放送などの記者が参加し、高齢社会の課題とその実態についての様々な角度からのレクチャーと議論が行われた。また日米の記者が互いに学びあう機会でもあった。

この事業はその後「エイジブーム・アカデミー」と名づけられ、ILC米国における重要なプロジェクトに発展したが、日本では継続ができなかった。

- メディアプロジェクトの日本における報告会出席のため来日。

- 名古屋で開催された長寿科学振興財団主催の第10回国際シンポジウムにおいて「長寿社会におけるQOL」をテーマに基調講演を行う。豊かな長寿生活を達成するためには、寿命の長さだけではなくQOLの質が重要な要素であり、それは受動的なものではなく、獲得するための努力が必要な過程であり目標なのだとして強調した。

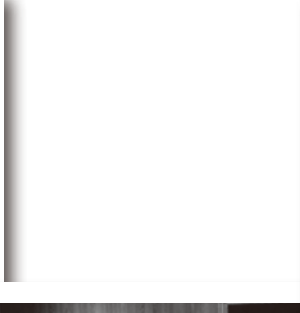
ニューヨークタイムズ・マガジン インタビュー  
高齢者に対して  
新しい見方をした人物

## 1998年(71歳)

- ILC米国は、設立以来8年間籍を置いたマウント・サイナイ医科大学から独立し、NPOとなる。マンハッタン・アップパーイーストサイド(60East 86Street)に4階建てのビルを購入し、オフィスを移転した。

## 2002年(75歳)

- 1982年にウィーンで開催された第1回から20年後、マドリッドで開催された第2回「国連高齢化に関する世界会議」において、バトラー博士は「高齢者の人権宣言」を行う。この宣言は最終的に世界160カ国の代表者に承認され、本会議最終報告書の骨子を成すものとなった。



## 2003年(76歳)

- 「米国の高齢者の人権とニーズの向上およびQOLの改善に貢献した」として、第10回 ハイツ賞 (Human Condition部門) 受賞。

## 2004年(77歳)

- コロンビア大学250周年記念「偉大なコロンビア大学出身者250人」に選出される。
- 「国際アルツハイマー病協会第20回国際会議・京都・2004」において、ビデオによる基調講演を行った。この中で、2002年第2回国連高齢化に関する世界会議での「高齢者の人権宣言」をベースに、ここ京都では「認知症の人とその家族のための人権宣言」を提案したいと、その熱い思いを語った。

## 2005年(78歳)

- ブッシュ政権下での第5回「高齢化に関するホワイトハウス会議」において閉会式のスピーチを行う。  
このスピーチでは10年前に博士が議長を務めた会議以後、アメリカにおける高齢問題が政策的にも社会的にも停滞を余儀なくされている現状を鋭く指摘し、ベビーブーマー世代が高齢者となるリスクを社会全体の連帯でどう乗り越えていくかについて、率直でしかもあくまでも建設的な提言を行い、聴衆に大きな感動を与えた。

## 2007年(80歳)

- サンフランシスコで開催された米国老年学会 (GSA) 60周年記念大会では、「長寿という偉業達成に向けた世界全体で行うべき課題」という壮大なテーマでの基調講演を行った。高齢化という世界規模の難題には各国が連携し、保健、水資源、教育、高齢化についてのグローバルな戦略が必要であり、特に先進諸国は開発途上国に対して積極的な働きかけを行い、その経験を共有しながらリードしていくことが重要であるとして、地球規模での行動提言を行った。

## 2008年(81歳)

- “The Longevity Revolution” 刊行。

発言 “The Longevity Revolution”  
序文

## 2009年(82歳)

- ILC米国とコロンビア大学の共催で「アルツハイマーと高齢社会」賢人会議を開催。世界各国のアルツハイマー病に関する最新情報の共有化と、医学的あるいは経済・社会的な将来の取り組みの方向性を模索した。日本からは長谷川和夫博士が出席した。

寄稿 長寿社会グローバル・  
インフォメーションジャーナル 11号  
今改めて、プロダクティブ・  
エイジングを考える

## 2010年(83歳)

- コロンビア大学教授就任。  
“The Longevity Prescription” 刊行。

発言 累積債務と人口高齢化

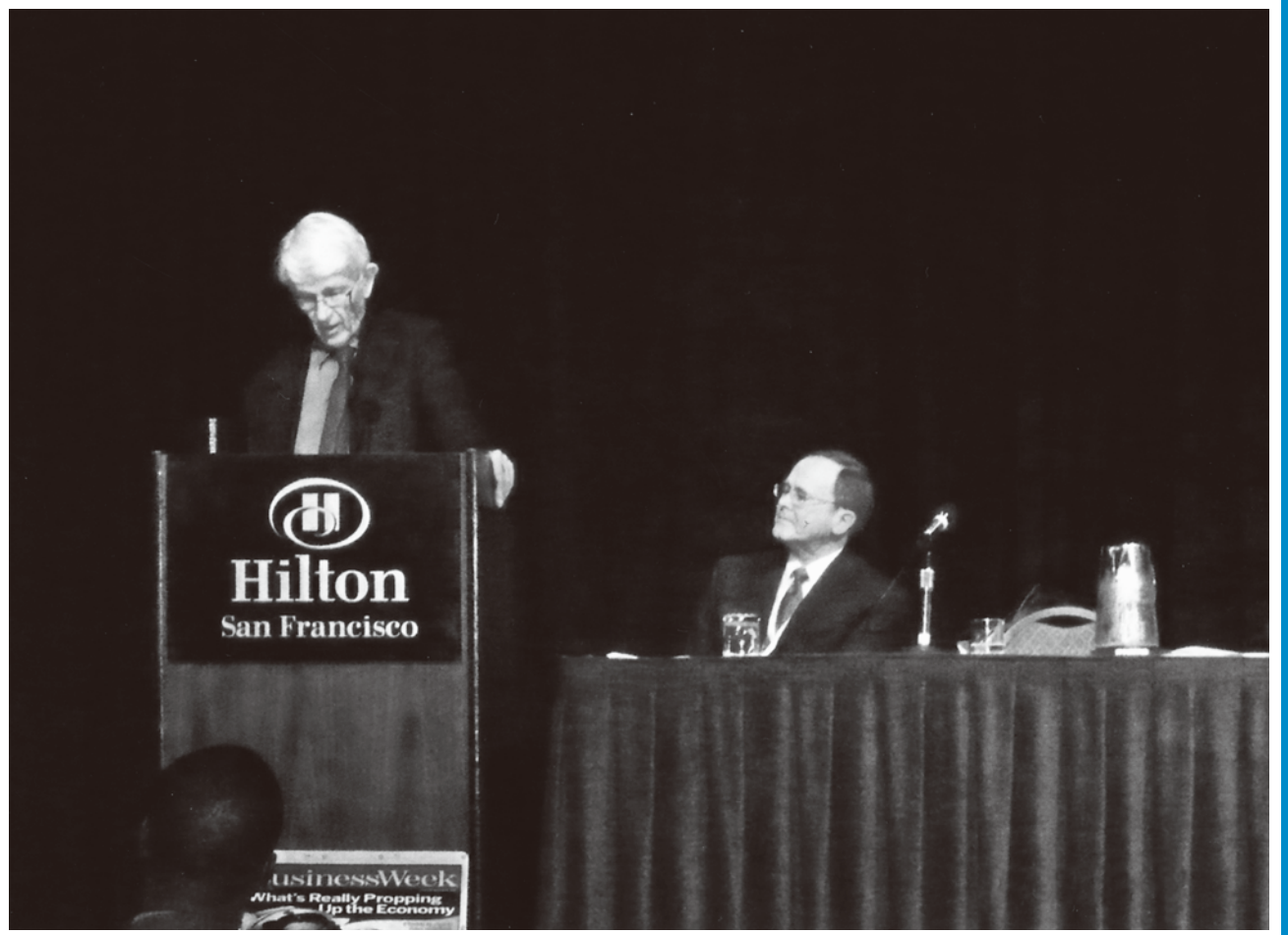
## 2010年7月4日

- 逝去。

追悼式

寄稿 森岡茂夫  
木村利人  
横田安宏  
田村雅子  
若松茂生  
山崎史郎  
金田一郎  
塚田典子  
祖父江逸郎  
金平輝子  
井形昭弘  
府川哲夫





2007年  
米国老年学会(GSA)60周年記念大会(サンフランシスコ)で  
講演するバトラー博士